オンライン交流を通じた外国語および外国文化の学習意欲向上に関する基礎的研究
―岐阜市立女子短期大学とプリンス・オブ・ソンクラー大学による取り組みを事例にして―

A Basic Study on Enhancing Motivation in Learning Foreign Languages and Cultures by Online Exchange Program
―A Case Study of Online Exchange Program Conducted by Gifu City Women's College and Prince of Songkla University―

今　悠恭[1]　　小森　雄太[2]　　松浦　康之
Yuki KON　　Yuta KOMORI　　Yasuyuki MATSUURA
[1]プリンス・オブ・ソンクラー大学人文・社会科学部　[2]明治大学政治制度研究センター

Abstract

In 2020, by the pandemic of COVID-19, many educational institutions such as universities around the world, were urgently forced to switch from face-to-face lessons in classrooms to online lessons via communication devices such as computers and smartphones. In addition, by the pandemic, many international exchange programs such as study abroad programs were cancelled. In order to cope with this situation, an online international exchange program between Gifu City Women’s College (GCWC) and Prince of Songkla University (PSU) was implemented with the aim of improving language skills, motivation to learn, and knowledge of culture and society by interacting with students of the same age. This paper reviews the details of the program and the results of a questionnaire survey conducted before and after the program, and discusses the motivation of GCWC and PSU students to learn foreign languages and cultures.

Keywords : オンライン交流、国際交流、異文化交流、学習意欲、語学教育

はじめに

「グローバル」「国際交流」「異文化理解」などの言葉を頻繁に耳にする昨今、タイでは約 18 万 5,000 人もの人々が日本語を学習している（国際交流基金 2019、外務省 2020）。また、世界に目を向けると、グローバル化の影響により、1990 年は 130 万人だった留学生数は 2000 年には 210 万人、2017 年には 509 万人と 30 年で約 4 倍になった（松浦ら 2016、UIS 2017）。

しかし、2020 年、新型コロナウイルス感染症（以下「COVID-19」とする）の爆発的な蔓延により、タイや日本をはじめ、世界中の教育機関が教室での対面授業からパソコンやスマートフォンなどの通信デバイスを介したオンライン授業への転換を強いられることとなった。それだけでなく、交換留学などのさまざまな国際交流関係事業が中止となり、筆者らが所属している岐阜市立女子短期大学国際文化学科（以下「GCWC」とする）やプリンス・オブ・ソンクラー大学人文・社会科学部東洋言語学科日本語専攻（以下「PSU」とする）に所属する交換留学を希望していた学生たちも留学中止を余儀なくされた。

これまでにも GCWC と PSU の学生交流が行われていたことなどを踏まえ、両大学の教員に外部有識者を加えたプロジェクトチーム（以下、「PT」とする）を組織し、塩谷 2019、鄭・大橋 2011 および鄭・大橋 2012 などの先行研究を基に GCWC と PSU とのオンラインでの国際交流（以下「オンライン交流」とする）を実施するに至った。オンライン交流は、同年代の学生と日本語で交流することで語学能力や学習意欲の向上、文化や社会に関する知識を身につけることを目的とし、実施期間は 2020 年 9 月 28 日～10 月 26 日に、週 1 回 90 分のオンライン交流を計 4 回行った。実施方法は Microsoft Teams を用い、GCWC の学生（以下、「日本人学生」とする）は 21 名、PSU の学生（以下、「タイ人学生」とする）は 12 名参加した。また、今回のオンライン交流実施の利点と課題を今後に生かすために、オンライン交流前後にアンケート調査を実施した。

本論文はオンライン交流の実施内容およびその前後のアンケート結果を踏まえ、GCWC および PSU に所属する学生の外国語および外国文化の学習意欲に関する考察を行い、今後の課題

とオンライン交流の展望を提示する。

２．オンライン交流

２－１．交流概要

PSU では、2020 年度前期の授業開始は 7 月 13 日で、前期前半の 9 週間、9 月 13 日まではオンライン授業（一部の限られた授業のみ、対面授業）が実施された。タイでは他国と比べ COVID-19 の患者が少なく、またタイ政府による出入国制限が早期から行われていたことなどから、9 月 14 日以降はすべて対面授業へと戻っている。国際交流については、PSU から日本の大学への交換留学やさくらサイエンスプランによる日本短期留学などが予定されていたが、国際交流関係の事業はすべて中止となっている。一方、交換留学の期間を終了し、日本から帰国したタイ人学生が数名おり、彼らからは日本語能力の維持になるような活動がないかという要望があった。

GCWC では、2020 年度前期の授業開始は 4 月 7 日を予定していたが、COVID-19 の拡大に伴い 5 月 18 日に延期され、全面オンライン授業で開始された。その後、6 月 1 日より実習系授業を中心に一部で対面授業を開始したが、現在も対面授業とオンライン授業の併用で講義を行っている。また、GCWC においても、交換留学生として来日予定であった中国人学生が来られないなど、国際交流関係の事業は中止が続いている。これらのことから、今回のオンライン交流を実施するに至った。

オンライン交流では、PSU の学生が興味・関心を持っている日本の文化や社会に関する事項をテーマとして取り上げた。オンライン交流開始前には PSU の学生に対し、日本への興味・関心に関するヒアリングを実施し、文化・教育、政治経済、就職活動の 3 つのテーマに大別した。これらを基に、PT で実施日程やテーマ、進行方法などをオンライン会議にて打ち合わせを行い、第 1 週はアイスブレークの週として、各学生の簡単な自己紹介、GCWC と PSU、大学所在地の紹介とした。また、第 2 週は日タイの文化・教育事情、第 3 週は日タイの政治経済、第 4 週は日タイの就職活動、それぞれ注目する内容とした。PSU では 3〜5 名の学生から構成されるグループを 3 つ編成し、事前に第 2 週以降の各テーマについて発表用スライドや動画などの準備を行った。GCWC では夏季休業期間であったため、グループは編成せず、テーマごとに発表学生を振り分け、各テーマについて発表用スライドの準備を行った。

２－２．各週の交流内容

第 1 週は参加学生が各々簡単に自己紹介（名前・出身地・趣味など）を行った後、所属する大学の簡単な紹介を行った。併せて、各地の有名な観光スポットや名物も紹介し、それらに対する質疑応答が行われた。

第 2 週は日タイの文化・教育事情について、紹介を行った。PSU の学生はタイの各地方の観光地、有名な食べ物や特産品について紹介した。また、教育についてはタイの制服文化や教育システムの紹介が行われた。日本人学生は岐阜の観光地や、大学・学科の紹介、大学内の設備や施設について紹介した。質疑応答ではタイ人学生から「大学で制服があったら着たいか」や「高校時代に化粧をして登校したか」など、学校文化・規則面の質問が多くあった。

第 3 週は政治経済について、行った。タイでは COVID-19 の蔓延に伴い、経済成長率のマイナス成長が続く状況となったことを踏まえ、有名な観光地であるサムイ島を有するスラータニー県出身の学生がコロナ禍で観光客が減り、現在では閑散とした観光地の現状を伝えた。また、タイでは 7 月以降、バンコクを中心に首相退陣要求や国王権限の制限を求め、頻繁に反政府デモが行われるようになったが、これらのデモが大学生などタイの若者が主体であり、バンコクから離れた PSU でも何度か行われた状況を踏まえ、実際にデモに参加したタイ人学生がオンライン交流前日にバンコクで行われたデモの様子を YouTube から紹介するなど実体験や時事問題をもとに発表した。

第 4 週は就職活動について、行った。タイ人学生はタイの一般企業・行政機関等への就職活動、自営業者としての実体験を紹介した。このテーマを担当した学生らは半年後には卒業を控えており、第 3 週を担当したタイ人学生同様、実体験をもとに紹介した。発表者の 1 人は現在キャットファームを経営しており、経営するまでの経緯や一般企業・公務員と比較した際のメリットなどを語った。そして、一般企業への就職活動では日本と違い、タイにはリクルートスーツがなくオフィスカジュアルなどの比較的自由な服装で許容されること、タイの公務員には制服があることなどを紹介した。日本人学生からは日本の就職活動の開始時期、キャリア支援室の利用方法、大学推薦で就職した場合の長所や短所についての紹介があった。質疑応答ではタイ人学生から「就職活動以外の就職方法（両親・親戚・知人の紹介による就職方法）があるか」「就職活動せずに起業する学生はどれくらいいるか」「日本人学生で自分の専門と関係がある仕事をする学生はどれくらいいるか」などの質問がなされた。

３．タイ人学生に対するアンケートの結果

３－１．アンケート結果の概要

オンライン交流の実施前後にアンケートを行った。アンケートは日本語とタイ語の 2 か国語表記で行った。参加人数は 12 名（男性 : 7 名、女性 : 5 名）で、そのうち日本へ渡航歴があるものは 8 名（1 か月未満 2 名、1 年未満 4 名、3 年未満 2 名）だった。また設問「日本語を勉強する理由（複数選択可）」では 12 名全員が「日本のアニメ・マンガ」を選び、以下「将来の仕事・就職」が 9 名、「日本語そのものへの興味」「日本への観光旅行」が 8 名と続いた。

３－２．事前アンケート結果

オンライン交流実施前のアンケートの「期待しているテーマは何か（複数選択可）」で多い順に「日本及びタイの教育・文化（9 名）」、「将来の進路・就職活動（6 名）」、「自己紹介・日本及びタイの概要説明／アイスブレーク（4 名）」、「日本及びタイの政治・経済（1 名）」となった。そして、11 名が「オンライン交流で日本人と交流できることを期待している」「交流前に日本語学習をしようと思うか」と回答し、8 名が「オンライン交流で日本語能力が向上することに期待している」と回答した。交流にあたり「日本語能力不足が不安」と回答したのは 10 名、「日本の文化や社会に関する知識不足が不安」は 11 名、「タイ（自国）の文化や社会に関する知識不足が不安」は 8 名だった。参加者 12 名全員がオンライン交流で「日本の文化や社会を学べることを期待している」と回答し、今回のオンライン交流への期待度の高さが窺えた。また、10 名が「オンライン交流前に日本文化や社会に関する学習をしようと思う」と回答し、11 名が「オンライン交流後に日本の文化や社会に関する知識が増える」と期待している。日本の文化・社会だけではなく、「タイ（自国）の文化・社会を伝えられることを期待している」と回答した学生は 11 名いた。10 名が「オンライン交流前にタイ（自国）の文化や社会に関する学習をしようと思う」「オンライン交流後にタイ（自国）の文化や社会に関する知識が増える」と回答している。以上のことからオンライン交流に高い期待が寄せ、日本語能力を向上させたいと考えている学生も多かった。

また、日頃からどのような方法で日本語学習意欲の維持をしているのかを質問した。多かったのは順に「YouTube などの動画サイトで日本語の動画を見ている」が 9 名、「日本のアニメ・マンガなどを見たり読んだりしている」が 8 名、「日本のドラマや映画などを見ている」「日本の芸能人の SNS（Instagram、Twitter 等）をフォローしている」が 7 名だった。また、「友人（タイ人）と日本語で話すようにしている」も 7 名と半数以上いたが、「日本人（友人・日本人教師）と電話・チャットしている」という設問では 3 名が「たまにしている」と回答し、「あまりしていない」が 5 名、「していない」が 4 名だった。これらのことから、参加学生の半数以上が自発的に視聴覚的な多くの日本語コンテンツに接していた一方で、発話・会話での日本語使用という点において日本語の接触頻度・使用頻度は少なかった。

３－３．事後アンケート結果

オンライン交流実施後のアンケートでは、「今回のオンライン交流で日本人と交流できたことに満足している」、「今回のオンライン交流で日本語能力が向上したことに満足している」と回答した学生は 9 名だった。「今回のオンライン交流で日本の文化や社会を学べたことに満足している」、「今回のオンライン交流でタイの文化や社会を伝えられたことに満足している」と回答した学生は 10 名だった。しかし、事前アンケートでは「交流前に日本語を学習しようと思う」が 11 名、「交流前に日本文化や社会に関する学習をしようと思う」が 10 名だったが、実際には「交流前に学習した」と回答したのはそれぞれ 8 名と 7 名で、事前アンケートと比較して 3 名が行わなかった。同様に「交流前にタイ（自国）の文化や社会に関する学習しようと思うか」は 10 名だったのに対し、事後アンケートで「学習した」と回答したのは 8 名で、2 名が行わなかった。そして、「今回のオンライン交流で日本語能力が増えたか」の設問に増えたと回答したのは半数の 6 名だった。また、「今回のオンライン交流で興味深かったテーマは何か」という設問では多い順に「日本及びタイの教育・文化」が 6 名、「将来の進路・就職活動」が 5 名、「自己紹介・日本及びタイの概要説明／アイスブレーク」4 名、「日本及びタイの政治・経済」2 名という回答があり、自由回答としては下記が寄せられた**【表 1】**。事前アンケートと比較して「日本及びタイの教育・文化」が 3 名減少した。

【表 1】今回のオンライン交流で興味深かったテーマに関する自由記述回答（著者ら作成）

สนใจในวัฒนธรรมที่แต่งต่างจากไทยหลายๆอย่าง（訳：いろいろタイと違う文化に興味を持っています。）
日本人にタイの経済や政治の事を伝えたいです。
みんなが卒業したら、どうなるか知りたいんです。多分将来の仕事を選ぶのに役に立つかもしれません。
日本人と親しいになりたいと思います。
日本の政府と政治についてもっと知りたいからです。
もっと知りたいと思います。
日本の文化が好き。
4 年生に就職活動が必要からです。
日本で留学する機会があって、たまにわざとではないが、文化の違いで相手に勘違いさせたから、そこでお互いの文化を知っておくべきではないかと思います。
日本には卒業した大学生の将来の仕事を見つけることがタイより簡単だと思います。
第三回の内容は分かりにくいと思います。
普通なことなのに、楽しくて、面白いです。

「今回のオンライン交流で日本語学習の学習意欲に変化があったか」という設問では12人全員が「学習意欲が増えた」とし、参加者全員がオンライン交流を肯定的に捉えている。「学習意欲が増えた」と回答した理由について、**【表2】**からはオンライン交流をして「思ったより話せなかった」「わからないことがあった」「聞き取れないところがあった」など学習者が自身の日本語に関する弱い部分がわかり、その結果「聞く能力向上のため」「話す能力向上のため」「日本語力の向上」と回答したと考えられる。

【表2】日本語学習意欲が増加した理由の自由記述回答（著者ら作成）

จริงๆก็ไม่ได้ส่งผลอะไรขนาดนั้น（訳：本当はそんなに影響されていないです）
もっと日本人と一緒に話したい。
交流した時は思ったよりすこし話して、ちょっと悲しかったです。ぞれで、よく話せるように今より日本語を勉強するつもりです。
声が小さくて、聞こえませんでした。
今回はわからないことと聞けないことがたくさんあるので、もっと練習しなければなりません。
日本人ともっと話したい。
日本の文化がもっとわかりたい。
今回のオンライン交流は楽しくて、日本語をもっと勉強したいです。
外国語学習者としては母語話者と話せるのがなんとなく少し学習意欲が出てしまいます。
もっと日本語を理解したいです。
色んな事を交流して楽しかったが、聞き取られないところもありました。聴解のスキルを上達したいと思います。
日本人と話すことはいいです。では、上手になれば、日本人と話すことも簡単になると思います。

４．日本人学生に対するアンケートの結果

４－１．アンケート結果の概要

日本人学生にもオンライン交流の実施前後に、タイ人学生と同様のアンケート調査を行った。参加学生人数は 21 名でそのうち海外渡航経験（留学・滞在）がないものは21名中11名と半数以上だった。設問「外国語を勉強する理由（複数選択可）」として一番多かったものは「外国語そのものへの興味」で13名が選んでいた。以下「アニメ・マンガ」「外国への観光・旅行」が 11 名、「国際理解・異文化理解」が 9 名、「将来の進学・仕事・就職」「外国との親善・交流」が7名と続いた。

４－２．事前アンケート結果

事前アンケート調査の結果、日本人学生が「オンライン交流で期待しているテーマ（複数選択可）」で一番多かったものは「日本及びタイの教育・文化」であり、16名だった。次が「将来の進路・就職活動」8 名、「自己紹介・日本及びタイの概要説明」3名、「日本及びタイの政治・経済」2名でPSU学生と期待しているテーマの順位は同じであった。そして20名が「オンライン交流で外国人と交流できることを期待している」「オンラインで自国（日本）の文化や社会を伝えられることを期待している」19名が「オンライン交流で外国の文化や社会を学べることを期待している」、13 名が「オンライン交流で外国語能力が向上することを期待している」と回答した。そして、19名がオンライン交流後に「外国の文化や社会に関する知識が増える」、17 名が「日本（自国）の文化や社会に関する知識が増える」ことを期待していると回答した。タイ人学生同様、日本人学生のオンライン交流に対する期待度が高かった。

不安要素では17名が「交流で外国語能力の不足」「外国の文化や社会に関する知識不足」が不安、12名が「日本（自国）の文化や社会に関する知識不足」が不安と回答した。しかしながら、オンライン交流に参加する前に17名が「日本（自国）の文化や社会に関する学習をしようと思う」、15 名が「外国の文化や社会に関する学習をしようと思う」、14 名が「外国語学習をする」と回答した。オンライン交流前の段階では不安要素を解消しようとしていた。

外国語の学習意欲の維持に関する問いでは、学習意欲の維持のために「外国のドラマや映画などを見ている」が16名と一番多かった。次に「芸能人のSNS（Instagram、Twitter等）をフォローしている」「YouTubeなどの動画サイトで外国語の動画を見ている」が13名だった。PSUの学生とは対象的に「外国のアニメ・マンガなどを見たり読んだりしている」は5人と少なかった。「外国人（友人、先生など）と電話・チャットしている」という設問では4名のみがしていると回答した。「友人（日本人）と外国語で話すようにしている」という設問では3名のみだった。タイ人学生同様、日本人学生も視聴覚的な外国語コンテンツには自発的に触れているが会話等での外国語の接触・使用頻度が少なかった。これは留学生の少なさや講義・課外活動などで留学生と接する機会が少ないからだと考えられる。また、コロナ禍により国際交流が中止となり、外国語の使用・接触機会や外国人の友人を作る機械が減ったことも一因と考えられる。PSU側にも言えることだが、普段の講義などで留学生と交流する機会を設けるなど外国語や外国人と接する機会を増やすこと

が望まれる。

４－３．事後アンケート結果

オンライン交流後のアンケートでは、17 名が「外国人と交流できたことに満足している」、18 名が「外国の文化や社会を学べたことに満足している」、16 名が「日本（自国）の文化や社会を伝えられたことに満足している」と回答した。「外国の文化や社会に関する知識が増えた」が 18 名、「外国の文化や社会に関する知識が変わった」は 16 名、「日本（自国）の文化や社会に関する知識が増えた」は 17 名、「日本（自国）の文化や社会に関する知識が変わった」は 12 名であった。

しかしながら、「オンライン交流前に外国語を学習した」と回答したのは 2 名だけであり、事前アンケートの同項目「オンライン交流前に外国語を学習する」の 14 名から大幅に減少した。そして「オンライン交流後に自分の外国語能力は変化したか」には 21 名中 18 名が「変わらなかった」と回答した。これらの原因は今回のオンライン交流が日本語で行われ、外国語を使用する場面がなかったためであり、当然の結果と言える。

他にオンライン交流前に実際に「外国の文化や社会に関する学習をした」のは 6 名、事前アンケートの同項目「オンライン交流前に外国の文化や社会に関する学習をする」が 15 名だったのと比べ 9 名減少した。「日本（自国）の文化や社会に関する学習をした」も 6 名で、事前アンケートの同項目「オンライン交流前に日本（自国）の文化や社会に関する学習をする」と比較すると 11 名の減少であった。

「外国語学習の学習意欲に変化があったか」には 20 名が「学習意欲が増えた」と回答した。主な要因として、**【表 3】**から PSU の学生の日本語能力に感化され、外国語学習に対する意欲が向上したと考えられる。一方で、今回のオンライン交流で、意欲が減った学生も 1 名みられた。

「オンライン交流で興味深かったテーマ（複数選択可）」で一番多かったものは PSU の学生と同様に「日本及びタイの教育・文化」で 11 名だった。以下「自己紹介・日本及びタイの概要説明・アイスブレーク」8 名、「日本及びタイの政治・経済」3 名、「将来の進路・就職活動」2 名だった。事前アンケートの同項目と比較すると「自己紹介・日本及びタイの概要説明／アイスブレーク」が 5 名増加、「日本及びタイの政治・経済」が 1 名増加、「日本及びタイの教育・文化」は 5 名の減少、「将来の進路・就職活動」は 6 名の減少だった。増減の理由として考えられることは、タイ人学生と同様に、事前アンケート段階でオンライン交流内容への期待度が高かった、または低かったことに起因して、今回の結果になったと考えられる。

【表 3】今回のオンライン交流で興味深かったテーマに関する自由記述回答（著者ら作成）

いろんな文化が知れたから
自分でつくった ppt をもとにタイの方に説明をして、それを聞き取ろうと一生懸命聞いてくれたから。
オンライン交流をすることで実際に外国の方と話すことができて、国際交流ができるから。
タイの学生さんは、日本語でパワーポイントの資料を作ることもできるのに自分は、英語ですらできないだろうと思い、もっと頑張る必要があると思ったから。
はじめてオンライン交流をしたから
交流したことで改めて外国語がコミュニケーションをとるために必要だと感じたから

【表 4】外国語学習意欲が増加した理由の自由記述回答（著者ら作成）

大学に制服があるのが面白いと思ったから
日本とタイの文化の違いが知れて、異文化の面白さを感じたから。
タイのことをほとんど知らなかったので、1 番初歩的なことだったが、とても知ることができたから。
タイの知らなかったことがたくさんあったので、面白かったです。
わかりやすかったから
食文化が興味深かった
国際交流は何度もして欲しいし、オンラインだとしても実際にあっているかのような感覚になるのでとてもいいと思いました。
今回のオンライン交流を通して、タイのことも日本のこともたくさん知ることができて良かったです。
楽しかった。

５．今後の課題

５－１．オンライン交流に関する課題

今回実施した 4 回にわたるオンライン交流で明らかとなった課題として第一に挙げられるのは、機材の準備・調整の入念な準備である。今回の交流にあたり、交流の前週や前日に接続テストやマイクテスト、スピーカー等の調整を行ったが、それでも交流第 1 週の自己紹介・アイスブレークの回では 30 分ほど機材の調整に時間を要した。また、**【表 2】**に「声が小さくて、聞こえなかった」と回答した学生がいるように、コロナ禍の影響で日本人学生はマスクを着用した状態で交流したこともあり、声がこもってしまい聞き取れないことが多くみられた。

事後アンケート項目「オンライン交流で興味深かったテーマ」

で事前アンケートでは9名が「日本及びタイの教育・文化」に興味があると回答したが、事後アンケートでは6名に減少していた。理由として、交流内容が自分の意図するものと違った・興味がない内容だった、日本人学生・タイ人学生が考える内容に乖離があったと考えられる。また、今回はGCWCの夏季休業期間中にPTで打ち合わせを行ったため、日本人学生の興味について検討することが難しい状況であった。これを解決するためには双方で検討し、交流内容を擦り合わせ、十分かつ詳細な打ち合わせを行うなど、内容改善に努める必要がある。

５－２．タイ人学生に関する課題

タイ人学生に関する課題として、第一に受け身の姿勢が強いことがあげられる。事前アンケートでは11名が「交流前に日本語を学習する」と回答したが、事後アンケートで「交流前に日本語を学習した」と回答した人数は8名に減っていた。同様に「交流前に日本の文化や社会に関する学習をした」「タイ（自国）の文化や社会に関する学習をした」と回答したのは 7～8 名で事前アンケートの同項目と比べると 2～3 名の減少であった。このような結果になった原因として、他のグループの発表内容がわからないため具体的に何を学習するかわからなかったことや、他のグループのテーマに興味が持てなかったなどが考えられる。また、交流にあたり各グループは自分たちの担当テーマについてのみ調べ、他のグループのテーマについては学習しなかったと考えられる。

改善案として日本人にテーマについて発表する前に、まずタイ人学生内で各テーマについて内容理解させ、疑問に思うことなどを発表・討論させる。そして、わからなかったことをオンライン交流時に日本人学生に確認する。そうすることで自分の担当テーマ以外にも興味や関心を持たせることができ、日本と自国の理解を深められると考えられる。

その他に、今回のオンライン交流でタイ人学生を観察して多くみられたこととして、質問の譲り合いが多くみられたことがあげられる。交流時の質疑応答では一人ひとりに質問がないか聞きていくと質問する学生はいたが、そうでない場合は教員に質問するなどしていた。そのため、交流後に留学経験者・未経験者それぞれに「質問があるなら、なぜ積極的に交流相手（日本人学生）に質問しないのか」と聞いた。留学経験者からは「留学経験もあるので今回は留学経験がない人たちに日本語を使ってもらいたい」「留学していない人に日本人と話すチャンスをあげたい」という声があった。留学未経験者からは「日本語が上手な人（留学経験者）の前で話すのが恥ずかしい」「自分の日本語に自信がないので、たくさんの人の前で日本語を使うのが苦手」などの声が聞かれた。これらを回避するためには普段の授業で日本語によるプレゼンテーションやスピーチなど人前で日本語を話す練習を多くさせ、日本語と使用場面に慣れさせることが必要である。また、多数対多数のオンライン交流形式ではなく、1 人対 1 人や 2 人対 2 人、1 人対 2 人などの少人数の形式にし、必然的に学生の日本語使用場面を作り出す必要があると考えられる。

５－３．日本人学生に関する課題

日本人学生に関する課題として、タイ人学生同様、受け身の姿勢が強いことがあげられる。それに加え、質問や発言することによって日本人学生の中で目立ったりすることを避ける傾向があった。そのため、自分以外の日本人学生が質問や発言をすることを待っている状態が多くあった。また、質問や発言するつもりがないと思われる 2～3 名の学生は、スマートフォンを操作している状況も見られた。この行動をオンライン交流中に指摘することは、交流を醸成した環境下並びに交流の進行上困難であったため、オンライン交流後に当該学生らへの対応を行った。

これらの改善案としては、日本人学生の人数を減らして実施するあるいは、多数対多数のオンライン交流形式ではなく少人数のグループでの交流形式にして、必然的に会話をしなければいけない状況を作り出す必要がある。また、今回のテーマは上述の通り、「タイ人学生が興味・関心を持っている日本の文化や社会に関する事項」についてオンライン交流を行った。上述の通り、今回のオンライン交流は日本とタイの学期日程の都合上、日本人学生側の意見を聴取・議論する時間がほとんど取ることができなかった。今後は事前にテーマに関する打ち合わせや事前準備を行うことも肝要である。

さらに、通信機器や使用するソフト、スクリーンの大きさや音声といった物理的な点も授業効果を事前想定ほど上げることができなかった要因である。これらについても改善することによって、授業効果や学習意欲の向上につながると考える。

おわりに

今回のオンライン交流に参加したタイ人学生 12 名のうち 9 名の学生が「日本人と交流できたことに満足している」、日本人学生21名のうち17名が「外国人と交流できたことに満足している」と回答した。そして、タイ人および日本人学生の多くが今回のオンライン交流によって、「外国語（日本語）の学習意欲が増えた」と回答していることを踏まえると、今回のオンライン交流はタイ人および日本人双方の学生に好影響を与えたと結論付けられる。

また、タイ人学生の半数が「今回のオンライン交流で日本語能力が増えた」と回答していることには、配慮する必要がある。これは事前学習の不足に起因すると思われるが、自分たちの担当テーマに関する言語（今回は日本語）だけを事前学習しても、他のテーマに関する知識がなければ交流内容が理解できず、そ

の時点での自らの言語能力や知識だけで交流することを強いられる。その結果、言語能力が増えたとは感じられないという悪循環に陥ることが懸念される。また、交流時に新しい言葉や知識を得られたとしても、すぐに定着し、運用できるとは限らない。

そのため、オンライン交流を実施する際には、参画する教員による継続的な働きかけが求められる。具体的には、教員がオンライン交流の実施に際し、学生の興味・関心を精査した上で、協力校との綿密な打ち合わせの実施を通じて、授業や交流の内容を検討する必要がある。また、参加する学生に対しても、自分の担当テーマ以外のものについても事前学習することを求めることにより、言語のみならず相手の国や地域の文化や社会に対する理解がより深化し、言語能力や関連諸分野の知識の強化に繋がると思料する。これらの可能性については、今後高まるであろうオンライン交流の必要性を検討する上で重要な課題であると思われるため、稿を改めて検討したい。

参考資料一覧

外務省（2020）「タイ王国基礎データ」（https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/thailand/data.html）（2021 年 1 月 6 日参照）。

国際交流基金 (2019)「タイ（2019 年度）日本語教育　国・地域別情報」

松浦康之、小森雄太、高田宗樹 (2016)「日本留学に関する基礎的研究－タイ地方部における日本語教育と留学の現状を踏まえて－」『福井大学大学院工学研究科研究報告』第 64 巻 33-41 頁。

UNESCO Institute for Statistics (2017), “National Monitoring: Inbound internationally mobile students by continent of origin”.

塩谷もも（2019）「国際交流科目を通じた異文化理解とは―「アジア文化交流」から考える―」『人間と文化』第 2 巻 178-189 頁。

鄭愛軍・大橋眞（2011）「実例による異文化コミュニケーションの問題分析―青島理工大学と徳島大学とのインターネット交流を中心に―」『大学教育ジャーナル』第 8 号 69-75 頁。

鄭愛軍・大橋眞（2012）「青島理工大学と徳島大学との遠距離ビデオ会議（SKYPE™）交流の実例分析―2011 年 4 月から 7 月までの交流内容を中心に―」『大学教育ジャーナル』第 9 号 74-80 頁。

（提出日　令和 3 年 1 月 6 日）